



あの頃、
僕は世界が溢れるくらい
恋をした。
あの時の君の声
今でも僕は
聞くことができる。
僕は生き残ってしまった
ロミオなんだ。
でも、たとえ今
この腕に君を感じなくても
僕は君を生きていく。

世界の中心で、愛をさけぶ

大沢たかお 柴咲コウ 長澤まさみ 森山未來 山崎 努

天海祐希 杉本哲太 宮藤官九郎 津田寛治 近藤芳正 木内みどり 田中美里

監督・脚本＝行定 勲／原作＝片山恭一（小学館刊）／主題歌＝「瞳をとじて」平井 堅（デフスターレコーズ）

脚本＝坂元裕二・伊藤ちひろ／製作＝本間英行／製作統括＝島谷能成・近藤邦勝・安永義郎・亀井 修・細野義朗・伊東雄三／プロデューサー＝市川 南・春名 慶／協力プロデューサー＝濱名一哉
撮影＝篠田 昇／美術＝山口 修／録音＝伊藤裕規／照明＝中村裕樹／編集＝今井 剛／キャスト＝田中忠雄／助監督＝蔵方政俊／製作担当者＝前田光治／音楽＝めいなCo.／サントラ＆イメージCD＝EPICレコードジャパン
製作＝「世界の中心で、愛をさけぶ」製作委員会（東宝／TBS／博報堂DYメディアパートナーズ／小学館／S・D・P／MBS）／東宝映画作品
©2004東宝／TBS／博報堂DYメディアパートナーズ／小学館／S・D・P／MBS 配給＝東宝 203092-202 <http://aiosakebu.yahoo.co.jp>

奇跡の純愛小説、未来を紡ぐ新たな感動作として映画化

小説『世界の中心で、愛をさけぶ』は、2001年の発売以来奇跡のロングセールスを続け、

現在21世紀の小説としては最大の発行部数を記録しています。(2004年2月現在、171万部)

初恋の相手の死による「喪失感」、そしてその人のいない世界での「魂の彷徨」。

小説『世界の中心で、愛をさけぶ』で描かれるのは、携帯電話のなかった時代のせつなくもストレートな純愛物語です。



映画版『世界の中心で、愛をさけぶ』では、主人公の“それから”が始まる

映画版『世界の中心で、愛をさけぶ』では、小説では殆ど語られることのなかった、その後の成長し大人になった主人公・朔太郎のストーリーを大幅に追加。映画のオリジナル部分である「現在の愛との対峙」と原作小説にある「過去のアキとの甘くせつない純愛」が織り成すアンサンブル・ストーリーとして再構築。

物語は、大人になった朔太郎(大沢たかお)の婚約者・律子(柴咲コウ)が失踪するところから始まる。律子の行き先が四国だと知りそのあとを追う朔太郎だったが、そこは初恋の相手・アキ(長澤まさみ)との思い出が眠る場所でもあり、朔太郎はしだいにその思い出の中に迷い込んでしまう…

サク(高校時代の朔太郎:森山未來)とアキの初恋は甘く淡いものだった——二人は一緒にラジオに投稿したり、ウォークマンで声の交換日記のやりとりをしたり、無人島への一泊旅行と…二人にとっては全ての一瞬が永遠のように感じられた。ところがアキが不治の病であることが発覚し、運命が急転する。懸命に生きようとするアキだが、直面する現実には避けられない。一方、サクは、アキの憧れだったオーストラリアの神聖なる土地・ウルルにアキを連れていく計画を思いつく。しかし病院を抜け出したふたりは、空港に向かうも、アキは飛行機に乗ることなくロビーで倒れてしまう…

現在。思い出の迷宮をさまよう朔太郎と律子は、やがて隠れていた「真実」を手繰り寄せる。そして、かつて朔太郎に伝えられることのなかったアキの最期のメッセージが、十数年の時間を超えて朔太郎のもとへ届くこととなる——

最高のチームが導きだした、新たな『世界の中心で、愛をさけぶ』

最愛の人の死を胸の奥にしまい込み、目の前の愛と葛藤する現在の朔太郎には、昨年から出演映画が目白押しで日本映画には欠かせない存在となっている[大沢たかお]。そんな婚約者を受し、運命的なキーパーソンとなる女性・律子には、TVドラマや映画また歌手としても同世代の女性の圧倒的な支持を集める[柴咲コウ]。不治の病に瀕しながらも懸命に生きようとする少女・アキには『黄泉がえり』『ロボコン』などの好演で、そのビュアな魅力に期待が集まる[長澤まさみ]。そんなアキをストレートに思い続ける少年時代の朔太郎には5歳から舞台で活躍、TVドラマ『ウォーターボーイズ』で脚光を浴びた[森山未來]。彼らを静かに見つめる、過去と現在の時間を結ぶ“時の番人”重蔵役には、行定作品『GO』でその圧倒的な存在感をみせつけた[山崎努]。そして、メガホンを取るのは『GO』で各映画賞を総なめにし、いま日本映画界で最も注目を集める監督とされている行定勲。未来の主人公を機軸にするアイデアを基に自ら脚本づくりにも取り組み、小説とはまた違った、むしろ小説の“その後”的な映画を作り出しています。原作者の片山恭一氏もその脚本には共鳴し、「僕の小説に対する“アンサームービー(答となる映画)”だ」と絶賛しています。また、岩井俊二作品『LoveLetter』『スワロウテイル』などを手掛けた篠田昇・中村裕樹コンビが撮影・照明にあたり、せつない物語を叙情的な映像美に見事に昇華させています。さらに、主題歌『瞳をとじて』は平井堅が担当。アキの最期のメッセージに対する“アンサーソング”として、自身初となる映画主題歌を美しいオーセンティック・バラードに仕上げており、小説⇄映画⇄音楽の最高のコラボレーションが実現しています。

愛する人の死。未来を紡ぐ愛——愛する人の「死」と生きていくために渴望する「愛」をテーマに最高のスタッフキャストで贈る、流れる涙が心に沁みる純愛タペストリーの誕生です。



僕は君を生きていく。